研究論文

中学生における教室と保健室の「居場所」としての心理的機能の比較
—学校享受感の視点から—

今吉　このみ[1)]，長江　美沙[2)]，五十嵐　哲也[3)]

【要旨】中学生における教室と保健室の「居場所」としての心理的機能について，学校享受感の視点から検討した。その結果，「被受容感」「精神的安定」「行動の自由」「思考と内省」「自己肯定感」については，保健室よりも教室に強くそれらの機能を感じていることが示された。また，保健室よりも教室に「精神的安定」「行動の自由」「思考と内省」を強く感じる生徒の方が，学校享受感が高かった。このことから，教室よりも保健室に強く「精神的安定」「行動の自由」「思考と内省」を感じている生徒の場合，学校適応に何らかの問題を抱えている可能性を示唆している。担任と養護教諭の連携から，各場所での生徒の状況を把握する必要があろう。

キーワード：「居場所」，学校享受感，保健室，教室

Ⅰ．問題と目的

近年，子どもの心の居場所づくりが必要であると言われるようになった。その背景には，1980年代に不登校の問題が急増したことがあげられる。子どもたちが，学校を自分の居場所として考えられないことがその要因になっているのではないかと推測され，それ以降，不登校の子どもたちに居場所を求める考え方が広まった。さらに1992年には，文部省学校不適応対策調査研究協力者会議[1)]が報告をまとめ，学校内の様々な場所が心の居場所になりえること，保健室も心の居場所のひとつであることが指摘された。このような状況をもとに，文部科学省生涯学習政策局生涯学習推進課は「子どもの居場所づくり新プラン」[2)]を発表し，学校内外での心の居場所づくりへの具体的な取り組みが進んでいる。

なお，「居場所」という言葉の定義については，人がいる場所という物理的な意味があげられる。しかしながら，心理学的な研究の上では，「児童生徒が存在感を実感することができ，精神的に安心することができる場所」[3)]，「自分が自分でいるための環境」[4)]，「自分が自分らしくいることができる場所」[5)]などのように，ありのままの自分を受け入れてくれる存在として位置付けているものがある。また，単に受け入れられるだけでなく，「一人ひとりの個性が大切にされ，自分の能力が十分に発揮でき『自己存在感』を得られるような，精神的に安定できる場所」[6)]のように，その場所での活動にまで言及したものも散見される。しかしながら，近年の居場所づくりに関する取り組みの動向を踏まえると，具体的な物理的場所の状況をも検討する必要があると考えられる。そこで，本研究では，「『ここが自分の居場所である』と自己認知している場所であり，日常生活の具体的な場所であることとする」[7)]という定義に従うこととした。

ところで，「居場所」研究は，どのようになされているのであろうか。例えば，小畑・伊藤[8)]は，心の居場所が「対人関係」「娯楽」「休息・排泄・食事」「家・部屋」「活動」「自己・孤独」「自然」「場所・建物」「その他の具象語」「その他の抽象語」に分類されることを指摘した。また，沖田[6)]は不登校の子どもの居場所について，「主体的－客体的」「制度化－非制度化」の２軸によって分類している。このように，「居場所」研究では，場に応じた特性の理解を目指すことにより，子どもたちに必要な「居場所」とは何かが検討されていると言えよう。こうした研究

平成22年12月６日受理
[1)] 刈谷市南部適応指導教室
[2)] 名古屋市立緑区扇台中学校
[3)] 愛知教育大学養護教育講座
igarashi@auecc.aichi-edu.ac.jp

動向に関連する学校内における検証としては，教室・体育館・保健室・職員室・校庭・廊下・登校の道・下校の道の分析[9)10)]や，教室・保健室・相談室の検討を行った研究[11)]が認められる。特に杉本・庄司[11)]では，杉本・庄司[7)]の詳細な「居場所」機能（「被受容感」「精神的安定」「行動の自由」「思考と内省」「自己肯定感」「他者からの自由」）を検討しており，校内での居場所づくりを推進する上で有用性が高いと示唆される。

しかしながら，先行研究においては，これらの「居場所」がいかなる心理的機能を有するのかという点までは言及していても，それらが学校享受感にどのような関連性を示すかは検証されていない。各個人がどの機能をどの場に求めやすく，その希求する場の違いは学校享受感にいかに関与しているのか。この点を明らかにすることは，場に応じた支援策を検討する上で重要な視点を提供するものと考えられる。

したがって，本研究では，不登校が急増する中学生に焦点を当て，その校内での「居場所」の検討を行う。場としては，多くの生徒が利用する機会があり，また教職員が常駐する場所で，かつ場によって支援者が異なるところを想定し，教室と保健室の比較を行うこととした。この2つの場における「居場所」としての心理的機能の比較を行い，それらの差異がどのように学校享受感と結びついているのかを検討したい。

Ⅱ．方法

1．調査対象

A県内の中学生211名を対象とし，調査を行った。しかし，13名の回答不備を認めたため，198名を分析の対象とした。1年生66名（男子30名，女子36名），2年生63名（男子30名，女子33名），3年生69名（男子37名，女子32名）であった。また，有効回答率は93.84%であった。

2．調査内容

フェイスシートで学年，性別を尋ねた後，以下の項目を尋ねた。

（1）保健室来室経験

保健室に来室したことがあるかどうかについて，「行ったことがない」「以前行ったことがある」「たまに行く」「よく行く」の4件法で実施した。

（2）「居場所」としての心理的機能

杉本・庄司[7)]の「居場所」の心理的機能を測定する尺度35項目を用い，「とてもよくあてはまる」「まああてはまる」「あまりあてはまらない」「ぜんぜんあてはまらない」の4件法で実施した。下位尺度は，「被受容感」「精神的安定」「行動の自由」「思考と内省」「自己肯定感」「他者からの自由」の6因子構造である。これについては，教室と保健室をそれぞれ想定させ，各場所での感じ方を回答させた。なお，（1）で「行ったことがない」と回答した者は，想像して答えるように求めた。

（3）学校享受感

古市[12)]の学校生活享受感情測定尺度13項目を用い，「はい」「はいに近い」「いいえに近い」「いいえ」の4件法で実施した。なお，本尺度には採点対象外項目3項目が含まれているため，これらは得点から除外した。

3．調査時期と手続き

2009年9月に，調査協力者である担任教師に実施を依頼し，授業時間の一部を用いて各学級で一斉に回答，回収された。質問紙は無記名で行なった。

Ⅲ．結果

1．保健室の来室状況と性別による各場所の「居場所」としての心理的機能の比較

まず，保健室の来室状況の実態を検討したところ，「行ったことがない」は30名（15.15%），「以前行ったことがある」は114名（57.58%），「たまに行く」は49名（24.75%），「よく行く」は5名（2.53%）であった。このように，「よく行く」と回答した者が少なかったため，以降の分析では「たまに行く」と合わせて同一の群として扱うこととした。

その上で，保健室への来室状況と性別によって各変数に差が見られるかを検討した。その結果，保健室における「居場所」としての機能（Table 1）については，「思考と内省」において交互作用が認められた。単純主効果の検定を行なったところ，性別では女子で有意であり，「以前行ったことがある」より「よく行く，たまに行く」の得点が高かった。保健室来室状況では「よく行く，たまに行く」で有意であり，男子より女子の得点が高かった。その他，「被受容感」で性別，「精神的安定」で来室状況，「行動の自由」で来室状況と性別，「自己肯定感」で来室状況，「他者からの自由」で性別の主効果が，それぞれ認められた。

教室における「居場所」としての機能（Table 2）については，「思考と内省」において交互作用が認められた。単純主効果の検定を行なった

Table 1　保健室来室状況と性別による「保健室の居場所としての機能」の差

	来室状況①		来室状況②		来室状況③		来室状況	性別	交互作用
	男	女	男	女	男	女			
	n=20	*n*=9	*n*=51	*n*=59	*n*=23	*n*=29	*F*値	*F*値	*F*値
	M　*SD*	*M*　*SD*	*M*　*SD*	*M*　*SD*	*M*　*SD*	*M*　*SD*			
被受容感	1.75 (.93)	1.97 (.73)	1.83 (.74)	2.01 (.73)	1.74 (.75)	2.38 (.67)	.85	7.12 **	1.72
精神的安定	1.76 (.86)	1.76 (.42)	1.79 (.72)	2.03 (.75)	1.96 (.83)	2.52 (.80)	4.27 *	3.81	1.24
行動の自由	1.53 (.74)	1.71 (.49)	1.70 (.63)	1.74 (.69)	1.73 (.80)	2.30 (.83)	3.76 *	4.27 *	2.31
思考と内省	1.46 (.83)	1.89 (.89)	1.62 (.74)	1.71 (.74)	1.58 (.78)	2.45 (.93)	3.61 *	11.29 **	4.23 *
自己肯定感	1.26 (.75)	1.38 (.49)	1.42 (.67)	1.39 (.55)	1.57 (.83)	1.98 (.77)	6.18 **	1.95	1.78
他者からの自由	1.55 (.90)	2.33 (.97)	1.87 (.93)	2.19 (.97)	1.68 (.79)	2.60 (.85)	.45	17.77 **	2.11

＊来室状況①：行ったことがない　　* $p < .05$　** $p < .01$
来室状況②：以前行ったことがある
来室状況③：たまに行く，よく行く

Table 2　保健室来室状況と性別による「教室の居場所としての機能」の差

	来室状況①		来室状況②		来室状況③		来室状況	性別	交互作用
	男	女	男	女	男	女			
	n=20	*n*=9	*n*=51	*n*=59	*n*=23	*n*=29	*F*値	*F*値	*F*値
	M　*SD*	*M*　*SD*	*M*　*SD*	*M*　*SD*	*M*　*SD*	*M*　*SD*			
被受容感	3.17 (.78)	3.43 (.37)	2.99 (.66)	3.21 (.68)	2.78 (.94)	3.32 (.61)	1.11	7.45 **	.90
精神的安定	2.97 (.86)	3.12 (.69)	2.84 (.78)	2.89 (.74)	2.78 (1.00)	3.24 (.67)	.89	2.73	1.19
行動の自由	2.56 (.66)	2.62 (.75)	2.62 (.69)	2.43 (.73)	2.45 (.87)	2.67 (.67)	.12	.05	1.45
思考と内省	2.19 (.64)	2.25 (.76)	2.38 (.79)	2.14 (.68)	2.03 (.89)	2.76 (.73)	.73	1.98	7.33 **
自己肯定感	2.56 (.89)	2.72 (.63)	2.56 (.82)	2.26 (.82)	2.32 (1.02)	2.70 (.67)	.92	.30	3.24 *
他者からの自由	1.83 (.80)	2.00 (.54)	2.09 (.76)	1.80 (.63)	2.17 (.99)	2.12 (.73)	1.42	.20	1.25

＊来室状況①：行ったことがない　　* $p < .05$　** $p < .01$
来室状況②：以前行ったことがある
来室状況③：たまに行く，よく行く

ところ，性別では女子で有意であり，「以前行ったことがある」より「よく行く，たまに行く」の得点が高かった。保健室来室状況では「よく行く，たまに行く」で有意であり，男子より女子の得点が高かった。また，「自己肯定感」でも交互作用が認められた。単純主効果の検定を行なったところ，性別では女子で有意であり，「以前行ったことがある」より「よく行く，たまに行く」の得点が高かった。保健室来室状況では「以前行ったことがある」で有意であり，女子より男子の得点が高かった。その他，「被受容感」で性別の主効果が示された。

2．各場所での「居場所」としての心理的機能と学校享受感との関連

保健室と教室それぞれに感じる居場所の心理的機能は，学校享受感とどのように関連しているのかを見るために，Pearsonの積率相関係数を算出した。その結果，「保健室における行動の自由」と「学校享受感」，「保健室の他者からの自由」と「学校享受感」には有意な差がみられなかった。しかし，それ以外については，全て有意な関連が認められた。以上については，Table 3に示した。

Table3　保健室と教室の心理的機能と学校享受感の関連

	学校享受感
（保健室）	
被受容感	.29 **
精神的安定	.31 **
行動の自由	.14
思考と内省	.18 *
自己肯定感	.15 *
他者からの自由	.09
（教室）	
被受容感	.56 **
精神的安定	.69 **
行動の自由	.50 **
思考と内省	.38 **
自己肯定感	.51 **
他者からの自由	.37 **

* $p < .05$　** $p < .01$

3．各場所に対する「居場所」としての心理的機能の強さに関する個人内比較

生徒は，どのような居場所機能を保健室に強く感じ，あるいは教室に感じやすいのか。この点を調べるため，それぞれの心理的機能について対応のあるt検定を行った。その結果（Table 4），「被受容感」「精神的安定」「行動の自由」「思考と内省」「自己肯定感」について有意差が見られ（p<.01），いずれも教室の得点が高いことが示された。「他者からの自由」については，有意差は見られなかった。

Table 4　教室と保健室における「居場所」の心理的機能の個人内比較

	保健室	教室	t値
	M　SD	M　SD	
被受容感	1.95（.77）	3.11（.71）	−18.70 **
精神的安定	1.98（.79）	2.92（.79）	−15.19 **
行動の自由	1.80（.74）	2.54（.72）	−11.69 **
思考と内省	1.77（.83）	2.30（.77）	−9.78 **
自己肯定感	1.50（.70）	2.47（.83）	−15.51 **
他者からの自由	2.05（.96）	1.98（.75）	.85

** p < .01

4．「居場所」としての心理的機能を強く感じる場所の違いによる学校享受感の差

保健室と教室のどちらに「居場所」の心理的機能を感じるかで，学校享受感にどのように影響するのかを調べるため，居場所の心理的機能を教室よりも保健室に強く感じる群と，居場所の心理的機能を保健室よりも教室に強く感じる群に分け，2つの群の学校享受感に差があるかを検討することとした。

群分けの方法は，居場所の各下位尺度得点について保健室と教室の差を算出した。その上で，いずれの場所への得点が高いかという基準によって，保健室群と教室群に分けた。保健室と教室における各居場所得点が同点であった者は，分析から除外した。

以上の手続きによって作成された2群間の学校享受感の差について，t検定により比較した（Table 5）。その結果，保健室よりも教室に「精神的安定」「行動の自由」「思考と内省」を強く感じる生徒の方が，有意に学校享受感が高かった。その他については，教室群と保健室群に差は認められなかった。

Ⅳ．考察

1．保健室の来室状況と性別の違いによる各場所での「居場所」機能の差

（1）教室の「居場所」機能

教室では，女子の方が「被受容感」を強く感じているという結果が得られた。また，教室での「自己肯定感」では，保健室に「以前行ったことがある」と答えた男子は，女子よりも得点が高かった。

これらの結果を考え合わせると，男子は教室という「居場所」において自分で自分を受け入れられていることが，女子は他人から受け入れられていると感じることが重要だと示唆される。高旗・山本[13]や高倉[14]は，友人関係が学校適応やストレスに及ぼす影響は，男子よりも女子のほうが大きいことを示している。本間[15]は，中学生を対象とした登校をめぐる意識の変化や欠席，欠席願望の抑制要因を検討した研究で，欠席促進理由の「学校不安」，登校理由の「学校魅力」，不登校生徒への評価意識の「配慮・共感」で男女に大きな有意差が認められ，いずれも女子が高かったと示している。このことは，女子が男子に比べ，学校内の対人関係のプラス感情もマイナス感情も両方に強い関心をもち，その影響を受けやすい傾向を示している。さらに落合・佐藤[16]によると，女子の場合は，友人と理解しあい共感し共鳴しあうといった，お互いがひとつになれるような関係を望んでいることが示されている。また，男子の場合は，自分に自信をもち，友だちと自分は異なる存在であると

Table 5　各「居場所」機能の教室群と保健室群における学校享受感の比較

	教室群		保健室群		
	n	M　SD	n	M　SD	t値
被受容感	164	26.47（6.97）	6	18.33（8.50）	2.32
精神的安定	146	26.96（6.82）	17	21.94（6.61）	2.95 **
行動の自由	131	27.14（6.85）	22	22.59（7.17）	2.77 *
思考と内省	116	26.50（7.13）	16	23.38（5.40）	2.08 *
自己肯定感	141	26.74（6.58）	10	24.70（7.18）	.86
他者からの自由	161	25.75（7.54）	10	25.10（8.09）	.25

* p < .05　** p < .01

いう認識をもって友だち付き合いをしていることが示されている。

以上を踏まえると，女子にとって，多くの友人と共感し共鳴しあうという付き合い方が教室を「居場所」と感じさせる反面，その「居場所」での友人関係が上手くいかなかったときに大きなストレスを感じることが推察される。一方，男子においては，教室を「居場所」であると感じる背景要因に他人の存在はそれほど影響せず，自分の考えや意思を重要とする傾向があることが推察される。

（2）保健室の「居場所」機能

保健室では，女子の方が「被受容感」「行動の自由」「思考と内省」「他者からの自由」を強く感じているという結果が得られた。女子は，保健室に来室することで，保健室を居場所と感じるような様々な心理的機能をより強く感じとっていると推察される。また，保健室への来室頻度が高い生徒は，保健室に高い「被受容感」「精神的安定」「行動の自由」「思考と内省」「自己肯定感」を感じていることが認められた。中村[17]によると，「居場所」と感じられるのは，日常生活に密接した具体的な場所であることが示されている。来室頻度が高ければ高いほど，生徒にとって保健室は日常生活により密接した場所になるであろう。したがって，こうした日常性を確保することが，保健室におけるあらゆる居場所としての心理的機能を高めることにつながるのではないだろうか。

では，それぞれの心理的機能ごとに見ることとする。保健室に一度でも来室経験がある生徒は，来室経験が一度もない生徒に比べ，保健室に高い「被受容感」を感じていることが認められた。浅川・高橋・古川[18]は，児童生徒が養護教諭に対して「自分を受け入れてほしい」という「受容」の欲求をもっているとしている。したがって，保健室ではこうした欲求を満たす機能を有することが，本研究からも確認されたと言えよう。

また，保健室に行く頻度が高いほど，保健室に「精神的安定」を感じていることが示された。池谷・今井・木下・伊藤・松田・吉岡[19]によると，中高生の半数以上が，自宅では一人でいるときに安らぎを感じている一方で，自宅以外の社会と接する場所で過ごすときには，一人よりも何らかの集団に属していることで安らぎを感じると示している。生徒にとって保健室は，学校の中にあるという点で「自宅以外の社会と接する場所」であるが，集団活動をする場所ではない。それにもかかわらず，「精神的安定」を強く感じるということは，「一人」，「集団」といった枠組のみではとらえきれない役割が保健室にはあるのではないだろうか。

「思考と内省」では，来室頻度の高い女子が，低い女子に比べ高い得点をとっていることがわかった。酒井・岡田・塚越[20]は，中学校保健室頻回来室者にとって，保健室の意味は『プラスイメージ空間（保健室に対して好印象を抱いていること）』，『ピア空間（保健室にいる他の生徒に仲間意識をもつこと）』，『リセット空間（保健室に入室することで次の行動へのエネルギーを得たり，自己調整できたりすること）』，『まなび舎（養護教諭との関わりの中で，生徒自身が保健室で成長している，学んでいると思うこと）』であるとしている。頻回来室者にとっての保健室の意味4つのうち『リセット空間』や『まなび舎』は，自己を振り返ったり考えたりしている点で「思考・内省」にあたると言える。したがって，本研究の結果も酒井・岡田・塚越[20]に一致していると考えられる。

「行動の自由」についても，以下のようなことが推察される。すなわち，保健室はけが人や病人の処置をするための部屋なので，生徒の行動は制限される場合がある。さらに，ほとんどの時間において養護教諭が常駐しているため，生徒の行動の自由は低いものと推測される。しかしながら，本研究では保健室への来室頻度が高いほど，「行動の自由」を感じるという結果が得られた。志賀・永井・森田・大谷[21]によれば，保健室登校生徒は，保健室において様々な空間の利用が認められており，その行動も読書やゲームなど，自由な様子である。このことから，保健室に来室すればするほど，保健室で生徒が自由に行動できる範囲に幅が広がる可能性が考えられる。

2．各場所での「居場所」としての心理的機能と学校享受感との関連

保健室での「被受容感」「精神的安定」「思考と内省」「自己肯定感」は，学校享受感との間に有意な正の相関が見られた。子どもたちが学校を楽しいと感じるためには，保健室が「自分が受け入れられている」，「心が落ち着く」と感じられ，さらに自分のことについて振り返ったり考えたりすることができる場所，自分のよいところも悪いところもありのままに認めることができる場所として構成する必要があると考えられる。

一方で，保健室での「行動の自由」「他者からの自由」は学校享受感に関連が見られなかった。

しかしながら，教室におけるこれらの心理的機能は，全て学校享受感に関連が認められた。この結果から，保健室よりも，教室の居場所としての機能を高めていく必要があると示唆される。古市[12]は，学級での友人関係が児童・生徒に学校享受感をもたらす重要な要因であると示している。本研究はこの指摘を支持するものであり，学校生活のほとんどの時間を過ごす教室という場所が，子どもたちの学校享受感にいかに大きな影響力をもっているかが示されたと言える。

3．保健室・教室における居場所の心理的機能の比較

中学生は保健室と教室において感じる「居場所」の心理的機能に違いがあるという結果が得られた。具体的には，教室では保健室よりも「被受容感」「精神的安定」「行動の自由」「思考と内省」「自己肯定感」を感じていることが認められる。

杉本・庄司[11]では，中学生は他の空間と比べて教室に良いイメージをもっており，特に「被受容感」が教室において高く機能していると述べている。本研究においても，教室における「被受容感」は最も高く，この指摘に一致している。教室は，友人関係や教師が存在する場である。したがって，これらの人間関係が「居場所」を感じるかどうかに大きく影響していることが示唆される。

また，保健室については興味深い結果が得られた。すなわち，教室に比べて「被受容感」「自己肯定感」「行動の自由」「思考と内省」が低く，「他者からの自由」が同等であるというものである。このことを，「自分ひとりの居場所」，「家族のいる居場所」，「家族以外の人のいる居場所」の機能的差異に注目した研究[7]と比較すると，保健室は「自分ひとりの居場所」と「家族以外の人のいる居場所」の機能の特徴を併せもつような，極めて独自性の高い場所であると考えることができる。ほとんど常に養護教諭がおり，けがの処置や健康相談活動の場である保健室は，一人でもなく，家族でもなく，友人や教師でもなく，養護教諭のいる特殊な居場所として感じ取られていることが示唆された。

4．「居場所」としての心理的機能を強く感じる場所の違いによる学校享受感の差

それぞれの心理的機能ごとに，各対象者が「保健室」「教室」のいずれに強くその機能を感じているかを明らかにした。その上で，その場所の違いによって学校享受感が異なるかを検討した。

その結果，「被受容感」「自己肯定感」「他者からの自由」において，場所の違いによる影響が認められなかった。このことから，この3つの心理的機能においては，場所が限定されることなく，保健室か教室どちらかにおいて生徒が感じることができれば，学校適応の向上につながるということが言えるだろう。そこで，これらの心理的機能が教室で感じられていない生徒には，保健室においてこれらの心理的機能を果たすことが求められると言える。よって，生徒が教室又は保健室において「被受容感」「自己肯定感」「他者からの自由」を感じられているか，担任と養護教諭との連携が求められると言えよう。

また，保健室よりも教室に強く「精神的安定」「行動の自由」「思考と内省」を感じている生徒の方が，学校享受感の得点が高かった。つまり学校が楽しいと感じるには，教室で精神的な安らぎが得られ，内省するゆとりが保証されていると感じていること，さらに，自分の思うように振る舞える感覚が必要となる。今後は，教室において，これらの感覚をどのように確保するかという実践的研究が求められる。

また，このことは，教室よりも保健室に強く「精神的安定」「行動の自由」「思考と内省」を感じている生徒の場合，学校適応に何らかの問題を抱えている可能性を示唆している。養護教諭は，保健室における対応の中でこのような様子に気づき，同時に担任との連携を図ることで教室の様子との比較を行うことが求められるであろう。

5．今後の課題

1つめは，調査対象が限定されていることである。調査校は1校のみであり，また，調査を実施した時期は長期休暇明けの9月初旬，調査回数は1回であった。今後，対象校や調査回数を増加させ，時期を検討する必要がある。

2つめは，本研究で明らかになった性差に関する結果について，その背景要因を具体的に探っていく必要があることである。例えば，女子の方が頻回来室を行っており，保健室の居場所としての機能もより強く感じていた。保健室のどのような環境や機能が，このような結果をもたらしているのか詳しく検討する必要がある。さらに，保健室において，特に女子に対して「被受容感」「行動の自由」「思考と内省」「他者からの自由」を保証するためにどのような取り組みができるのかを，検証することが求められる。

3つめは，保健室に来室したことのない生徒についてである。これらの生徒は，保健室に対して「被受容感」を感じにくいということが示唆された。そこで，どのような要因によって，このようなイメージが形成されているのかを明らかにしていくことが課題である。

4つめは，本研究の結果には，保健室来室理由が大きく影響するということである。この点を考慮した研究が必要であると言える。

5つめは，居場所を複数有していることの意義についてである。杉本・庄司[22]は，「居場所」があると答えた生徒の中で約7割の生徒が，ひとつの「居場所」だけではなく，種類の違う「居場所」を複数もっていたと述べている。本研究では，教室の「居場所」としての機能が重要である，との結果が得られた。しかし，教室と保健室の双方に対し，それらの機能を強く感じている者の特徴は何かということは，検討できていない。この点を踏まえて，学校内で複数の「居場所」をもつ者とそうでない者の比較を実施することが，課題として考えられる。

引用文献

1）文部省学校不適応対策調査研究協力者会議（1992）：登校拒否（不登校）の問題について－児童生徒の『心の居場所』づくりを目指して－

2）生涯学習政策局子どもの居場所づくり推進室（2004）：子どもの居場所づくり：地域子ども教室推進事業の実施にあたって　教育委員会月報, **656**, 2－25.

3）田中智雄（1992）：文部省学校不適応対策調査研究協力者会議「登校拒否（不登校）について－心の居場所づくりをめざして－」教育委員会月報, **44**, 25－29.

4）北山修（1993）：自分と居場所　岩崎学術出版社

5）田中順子（2002）：思春期・青年期の「居場所」研究の現在－具体的状況・感情・心理的機能について－　上智大学臨床心理研究, **25**, 193－198.

6）沖田寛子（1997）：不登校現象と子どもの「居場所」　山口大学文学会誌, **48**, 17－35.

7）杉本希映・庄司一子（2006）：「居場所」の心理的機能の構造とその発達的変化　教育心理学研究, **54**, 289－299.

8）小畑豊美・伊藤義美（2001）：青年期の心の居場所の研究－自由記述に表れた心の居場所の分類－　名古屋大学情報文化学部情報文化研究, **14**, 59－73.

9）小玉正博・真仁田昭・沢崎達夫（1982）：児童生徒の学校環境に対する空間イメージの構造と学校適応に関する研究　予報1：小学生の場合　教育相談研究, **20**, 25－41.

10）小玉正博・真仁田昭・沢崎達夫（1983）：児童生徒の学校環境に対する空間イメージの構造と学校適応に関する研究　予報2：中学生の場合　教育相談研究, **21**, 1－15.

11）杉本希映・庄司一子（2007）：中学校の教室・保健室・相談室における「居場所」の心理的機能の検討　筑波教育学研究, **5**, 37－52.

12）古市裕一（2004）：小・中学生の学校生活享受感情とその規定要因　岡山大学教育学部研究集録, **126**, 29－34.

13）高旗正人・山本穂波（1998）：学級の人間関係と登校回避感情に関する実証的研究　岡山大学教育学部研究集録, **108**, 93－100.

14）高倉実（1999）：思春期における日常生活ストレッサーの表出パターンと抑うつ症状との関連　学校保健研究, **41**, 107－116.

15）本間友巳（2000）：中学生の登校を巡る意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析　教育心理学研究, **48**, 32－41.

16）落合良行・佐藤有耕（1996）：青年期における友達とのつきあい方の発達的変化　教育心理学研究, **44**, 55－65.

17）中村泰子（1998）：居場所イメージに関する検討－連想語の調査を通して－　日本心理学会第62回大会発表論文集, 138.

18）浅川潔司・高橋慶子・古川雅文（2006）：児童・生徒の学校適応水準が養護教諭および保健室のイメージ作成に及ぼす影響　兵庫教育大学研究紀要, **28**, 25－33.

19）池谷辰仁・今井正次・木下誠一・伊藤良・松田慎也・吉岡大輔（2006）：中高生の生活スタイルと自由な時間を過ごす場所－利用者の社会的居場所としての地域施設に関する研究－　東海支部研究報告集, **44**, 533－536.

20）酒井都仁子・岡田加奈子・塚越潤（2005）：中学校保健室頻回来室者にとっての保健室の意味深まりプロセスおよび影響要因－修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた分析－　学校保健研究, **47**, 321－333.

21）志賀恵子・永井利枝・森田光子・大谷尚子（2005）：保健室登校生の保健室での生活の様子と養護教諭の対応　学校健康相談研究,

1, 50－57.
22) 杉本希映・庄司一子（2006）：中学生の「居場所環境」と学校適応との関連に関する研究　学校心理学研究, 6, 31－39.

謝　辞

本研究は，第一筆者と第二筆者が共同研究を行い，第三筆者が指導した平成21年度愛知教育大学養護教諭養成課程の卒業論文を，加筆・修正したものです。実施にあたり，調査に快くご協力いただきました中学生の皆様，ならびに教職員の皆様に心より感謝申し上げます。また，本研究をまとめるにあたっては，湘北短期大学の杉本希映先生にご指導いただきました。ここに記して，御礼申し上げます。